

「本文」のない「前文」

あるいは

シンポジウムのまえとあと

淺 沼 圭 司

*

話すことが不得手であり、その場でただちに反応できるほどの鋭敏さをもたない私にとって、「シンポジウム」なるものは、できれば避けたいもののひとつなのだが、今回設定されたテーマについては、いくぶんか発言できそうな気もしたので、シンポジウムにさきだつて、そのテーマについて考えられることをメモにまとめて、自分の発言の土台ないし枠組にしようと考えた。シンポジウムをふりかえてみると、その時々々の論議の流れに戸惑いながら、ともかくこの枠組の範囲内で発言しようとしたにもかかわらず、結局は支離滅裂な発言しかできなかったような気がする。以下に提示するのは、そのメモ——シンポジウムにさきだつて書かれたテキスト (Pré-texte) ——であるが、私の実際になされた発言にたいする「口実」ないし「いいわけ」(Prétexte)として読ま

れることを、すこしばかり期待していいいでもない。きわめて簡単なメモの段階をまったく脱して、そのために論議の展開もほとんどなされていらないが、加筆はできるだけ避け、語句のごく一部を改めるにとどめた。なお「……」の部分は、あとから書きたされたものである。

*

まずテーマの意味について。「文体」という語は、おそらく *„Stil“* という語と対応するのだから、ひとつの操作として「様式」という語に置き換えることもできるはずだし、この語が、ある筆者によって書かれたものすべてに共通する、「かたち」のうえでの特徴を意味するものだとすれば、芸術学的な概念としての「個人様式」に対応するものといえるだろうが、ここでは、おそらく「書かれたもの」としての論文の性質に対応させて、「文体」という語がえらばれたのだろう。ところで美学者竹内敏雄は、「様式」には規範的意味と記述的意味があると述べているが——たとえば「この作品は *„Stil“* をもっている」では前者の意味で、「この作品はゴシック様式である」では後者の意味で用いられているという——、実際の「様式」においては、このふたつの意味が重なり合っており、ただそのいずれかが他に優先するという関係にあると考えられる。たとえば、定家の歌体論においては、記述的意味が、後鳥羽院の歌論においては、規範的意味が優先する、などということも、あるいはできるのではないか。「文体」についても、このふたつの意味を想定することは可能だろうが、このシンポジウムでの論議は、しかし、その「記述的意味」にも向けられるべきなのだろう。なぜなら、「規範的意味」における「様式概念」は、つねに明白な価値意識によって根拠をあたえられており、価値判断の基準に関する論議を要請すると思われるが、「様式」が「かたち」に関わるものである以上、その判断は、根底において「感性的」な

ものでなければならず、その基準に関する論議そのものが、「主観性」と「客観性」についての「堂々巡り」に陥りかねないからである。「様式」の判断ないしは記述の問題そのものが、そう簡単にかたづけられるものではなく、相応の論議を要請するのだろう。しかしこのことに拘泥するなら、すでに出発の時点で、具体的な論議のいまだ始まらない時点で、「文体」ないし「様式」の記述における主観性と客観性の問題が論議されなければならないのかもしれない、テーマについての実質的論議にはいたらずに終わる危険も、十分にがあるだろう。

「実際の論議では、しかしふたつの意味での「文体」が交錯しながら用いられていたようだ。明確に二分することなど、実際にはできないのかもしれないが、その交錯が、論議をいくらか不分明なものにしていることも、否めないようだ。そして、全体の論議では、副題の「研究における主観性と客観性」についての論議が前面にでたように——あるいは一人歩きしたように——思う。そして、これこそ永遠に解決不可能な問題であり、あるいは逆に、あらためて論じるまでもない自明の問題なのだろう。方法上の懐疑など、研究者にとっては、できれば避けたいものであり、その時々を選択した方法にたいして、それ以外にありえないという確信をもっているのだろうから。だから「研究者の文体」に固執し、論議を具体のレベルにおくべきだったかもしれない。」

*

しかしなぜあらためて研究者の「文体」が問われなければならないのだろうか。人文科学の領域においては、研究者の論文がおおく個人によつて書かれる以上、それが研究者個人の個性的なものとみなめのとどめているのは、当然だろうが、にもかかわらず研究者の「文体」が、これまでは一般的論議の対象にかならずしもならなかったのは、なぜなのだろう。芸術——すくなくとも近代ヨーロッパ的な意味での、そしてこの国においても、

ほぼ通念的となった意味での芸術——が、すぐれて個性的な、感性的なとなみである以上、ある作家の作品の総体を、他の作家のそれから区別する、形式的な特徴が問題にされるのは、当然というべきだろうが、それにたいして研究者のいとなみは、真理の把握をめざした、普遍性と客観性を特質とする理性的なものなのだから、その業績の総体の特徴づける「形式的特徴」の把握は、かならずしも研究の本性に関わるものではない、そのような判断によるものなのだろうか。

たとえば「文体」についての、ロラン・バルトの言説。「ラング」とともに、「言語的自然」を構成するものとしての「文体」。それについて、言語的自然を超えるいとなみとしての、「書くこと」、「エクリチュール」。学的自然的言説もまた、ある意味できわめて自覚的ないとなみであるのだから、「文体」と「ラング」つまり「言語的自然」の超克のくわだてとしての、「エクリチュール」のレヴェルにおいてとらえられるべきであり、かりにその「文体」を考えるとしても、バルト的な意味での「文体」に還元すべきではないといわれるべきであり、かりにしかし「エクリチュール」は、「言語的自然」の超克のくわだてである以上、その方位は、「言語的自然」そのもののありかたによつて規定されざるをえないのではないか。ことなつたレヴェルにおけるふたつの「文体」、すなわち、「エクリチュール」のレヴェルにおける「文体」と、その方位を規定する「言語的自然」を構成する契機としての、「ラング」とならぶ「文体」（無意識のないし身体的なもの）。

「この点についての論議が、欠落していたようにも思う。有田さんの私にたいする質問は、たしかにこのことと関わるものだったが、あの時までの論議のながれは、この問題を展開させる方位をもっていなかったようだ。研究上の方法の差異にかかわらず、共通に論議しうるものが、ここに含まれているのではないだろうか。佐野みどりさんの発言も、このことと関連させてとらえることができるかもしれない。」

*

ところで、主観性と客観性を、あえて解釈と実証ととらえなおすことも、ひとつの可能性としては考えられるだろう。実証性ないし客観性が、学問にとって不可欠の条件だということは、おそらく否めないだろうが、しかしそのありかたは、けっして一様ではなく、研究対象の如何によつて異なつたものとならざるをえないのではなからうか。たとえば、作品が明瞭な物質的基盤を有し、そのありかを特定できる造形芸術などの場合には、すくなくともその基盤（物質的存在）については、厳密に客観的な、実証的な記述は可能だというべきだが、作品の物質的基盤が不分明であり、したがつて、作品の所在あるいはその同一性の根拠すら明確ではない、たとえば音楽などの場合には、客観的、実証的記述の厳密性は、なによつて保証されるのだろうか——楽譜は、キャンバスやその上の絵の具の斑点などが絵画作品の物的基盤であるのとおなじ意味では、音楽作品の物的基盤ではないことに留意する必要がある——。音楽研究が、かりに自然科学的な意味での客観性、実証性をもちうるとすれば、その場合の音楽は、楽譜によつて明瞭に——とはいえ、この明瞭度そのものは相対的ではないのだが——規定されうる要素、たとえば「音の高さ」、「音の持続」などによつてその構造を規定されるものに還元されることになるだろう。研究対象としての作品と、受容対象としての作品のあいだに介在する差異。

「シンポジウムのなかで、かなり時間をさいておこなわれた論争は、学問の条件を、再検証可能な実証性に求めるか、あるいは、全体的な論証過程の整合性に求めるか、結局はその差異に由来するものにほかならず、だから見解の差異、あるいは定義上の差異にすぎないとして、論議は平行するだけで、実質的な展開をもたらさなかつたといわざるをえないようだ。もっとも、自然科学的な方法にあらゆる検証を超えた絶対性を付与する学問観

は、フッサールによる批判以降、すでにその意義を失ったようにも思われるのだが。」

*

造形芸術の場合、さきの意味での差異は、たしかに音楽などに比して小さいといえるかもしれないが、まったく存在しないのではない。すくなくとも私の美学の観点からいえば、作品とは、受容者の意識にたいしてその都度現象するもの以外ではありえず、したがって作品の記述は、私にたいする現象の記述として、主観的、解釈的契機を必然的にそのなかに含まざるをえない。おそらくこの意味での「作品」に忠実な記述であることを意図する場合、記述における主観的契機の介在は否定しえないだろうし、記述を単純に客観的、実証的たらしめようとするれば、記述対象としての「作品」は、その具体的な在り方から抽象され、あるいはこの意味での記述にふさわしいものとして、あらかじめ、しかも無批判的に、構成されなければならないだろう。

「記述における主観性の介在は、いうまでもなく、記述の恣意性の容認を意味しはしない。むしろそこでは主観性をそのあるがままのありかたに還元するくわだてがなされるべきだろう。しかしこの問題もまた、はてしない論議へと展開して行くのだろう。また、作品の全体的なありかたにたいする反省がおこなわれたうえで、方法的な自覚にもとづいた研究対象の構成がおこなわれ、そのように構成された「作品」とその全体的ないし具体的なありかたにおける作品の連関への意識が、記述の根底にある場合には、問題はおそらく別のありかたにおいて現れるのだろう。」

*

おそらく作品の構造についても考える必要があるのだろう。作品が、N・ハルトマンやR・インガルデンのいうように、たとえば物理的存在から理念的存在にいたる多様な層から構成されるとすれば、あるいはE・スリオのいうように、単一の存在ではなく、複数の存在の照応関係においてあるとすれば、ひとつの言説によってすべてを記述することは、おそらく不可能といわざるをえないだろう。この際、客観的、実証的記述に直接対応する層ないし存在は、きわめて限定されたものであることに留意すべきだろう。というより、厳密に客観的、実証的な記述によつては、多層的、多存在的な「作品」の全体的記述は不可能というべきなのだろう。といつてその全体を一挙にとらえようとする言説が、しばしば独善的な主観的言説に墮す危険をもつことも指摘されなければならぬだろう。おそらく純粋に客観的、実証的な方法によつても、また純粋に主観的、思弁的な方法によつても、作品の作品であることを完全に言説化することは不可能なのだろう。問題は、だから、選択された方法にあるのではなく、その方法の限界を意識したうえで、可能なかぎり作品の全体を把握しうる言説のありかたを探究することだろう。だから、ある学問的言説の「かたち」を差異化するもの、その個別的特徴を決定するものは、選択された学問的方法そのものではなく、その方法に適應するものとして、あるいはその方法の限界をいくぶんかでも超えるものとして選択された言語使用の「ありかた」にはかならないだろう。そしてここにこそ、研究的言説においても、「文体」について語りうる、あるいは語るべき根拠があるのだろう。

「私は、今回のシンポジウムの主題のもつ積極性ないし意義をこのことの論議に求めていたのだが、自身十分にこのことを把握するにいたつていなかったために、発言のなかにそれを組み込むことができなかつた。問題は、言語使用の「ありかた」を規定する、おそらく複数の契機と、その関連のありかたなのだろう。」

*

作品を意味的集合体としてとらえた場合でも、その特質が「意味作用」(signification)のレヴェルにはなく、「意味」(sens)のレヴェルにあることは、たとえば「文学作品」の意味が、言語学的意味作用につきるものではなく、あるいは絵画作品の意味が、図像学的意味作用に限定されるものでないことから、あきらかだろう。このことからいえば、作品の全体的把握を志向する言説は、批評的と学問的とを問わず、ある意味で「隠喩的」(metaphorique)たらざるをえないことになるだろう——「隠喩的」であることを完全に拒否する芸術に関する言説は、おそらくまさにニーチェ的な意味で、蒼ざめた言説でしかないのだろうか——。学問的言説の「文体」が論じられるべき理由のひとつが、おそらくここにもあるだろう。もちろん、言語的な意味作用による、作品の意味作用のレヴェルの厳密な記述を欠いた言説が、単に恣意的な、したがって学問的言説としての資格を欠如するものであることは、いうまでもないだろう。

「問題のこれ以上の展開は、シンポジウムのテーマを大きく超えることなしには、おこないえないだろう。あきらかになったのは、学問論のむずかしさであり、それがときに陥りかねないある種の不毛だけだったのかもしれない。だからこの「プレテキスト」も、結局は「本文」を欠いて、宙吊りのままに中断せざるをえなかったのだろう。あるいは、この「プレテキスト」は、「本文」の不在をあらためて確認させるだけのものなのかもしれない。」